

## “てんとうむし”の復刊を祝う

奥谷 禎一

機関誌“てんとうむし”復刊心からお祝い申し上げます。姫路昆虫同好会とのお付き合いもとうとう20年を越えたかと思うと感慨無量であると共に長生きはしたいものと思っているが、老化はふせぐ手立てはなく年々衰えを感じる年頃になってしまった。以下に姫昆の思い出などを述べてお祝いの言葉としたい。

姫路を中心として播磨の昆虫類を目標とする同好会が、木村三郎・相坂耕作の両氏によって結成され、小野市在住の蝶屋山本広一氏と神戸大学にいた筆者が顧問として迎えられて何時の間にか20年が過ぎてしまった。この間には、木村氏には昭和51(1976)年から52年にわたる、大河内町の揚水発電所にかかわる自然環境事前調査にご協力頂いたことも大きな思い出である。神戸大学を定年退職後、家庭の事情で川越に転居したが、数人の方から何度か論文のご相談や筆者のもつ情報などお問い合わせもいただき、特に相坂氏には著書“播磨の昆虫”の序文をご依頼されたりして多くの方と交流できたことは感謝にたえない。先年“遊虫千年”という小冊子が送られてきて、同好会ができて20年経ったことを知った次第で、もうすこしお役に立てればとつくづく思った次第である。

筆者が調査に関わって歩いたところは、前述の大河内町以外に、地名を忘れた所もあるが、姫路市では増位山・広峰山付近と自然観察の森、赤穂市周辺、三日月町南端部などで、それぞれ忘れられない思い出はある。その他仁豊野のキマダラル

リツバメ探しや加西市のヒメハルゼミなど多くの虫と共にその自然環境が気になる所である。平成5(1993)年5月に“生物の多様性に関する条約”を締結しておきながら、日本の政治は条約に逆行するようなことがまかり通っているように思える。我々虫屋は昆虫を通して自然環境の保全と生物の多様性の温存を計りたいものである。

筆者が若い頃も同好会誌は盛んで、色々なものがあつたが、いわゆる3号誌が多くひどい場合は1号で終わってしまうものさえあり、割り切れない思いをさせられたものである。この時代は何といっても印刷費が高かつき、経済的な問題もあつたには違いない。今日ではコンピューターが扱えれば、素人でも安価に印刷ができるようになり先年は同好会誌にカラー印刷さえ現れ驚いた次第である。しかし、原稿を集めたり順序を考えたりは機械ではできないことで、編集者世話人の努力なしには会誌はできない。ガリ版紙姫昆サロンでつないで遂に“てんとうむし”の復刊にこぎつけたご努力に敬意を表する。

さらに播州は松村松年(1872~1960)・森 為三(1884~1962)などの昆虫学者や駒井 卓(1886~1972)・岡田 要(1891~1973)などの動物学者の育ったところであることを考えると、若い会員の中からこれらの諸先輩に勝るとも負けぬ大学者が生まれることを夢見ながら一言お祝い申し上げます。

(顧問 神戸大学名誉教授)